

4月11日「発信力で社会を変える」レポート

発信力は「諸刃の剣」

市川 衛さん（NHKディレクター）

「（マスメディアによる）誤った希望や、実現困難な約束の提示は、患者を傷つけるだけでなく、研究の正常な発展も妨げる」

JAMA（Journal of American Medical Association・アメリカ医学会雑誌）のある号の巻頭文の一節だ。筋肉細胞の培養を助ける物質を発見した論文のことを、まだ基礎実験の段階であるにも関わらず、新聞各紙が「失われた運動機能を取り戻す夢の技術」と報じたことへの怒りを記したものだ。医療に関する報道は、ときに人を傷つけ、社会に悪い影響を与える“諸刃の剣”であることを指摘している。

この号が発売されたのは、なんと1913年1月。つまり、ちょうど1世紀前のことだ。しかし指摘されている問題点は、今年1月の記事だと聞いても違和感はない。つまり私たちは100年を経過しても、本質的な課題を克服できていないのだ。

私はマスメディアに属し、そして医療福祉に関する報道をこれまで多く行ってきた。これまでの自分の番組を思い出してみると、ここで言う「誤った希望」（→メリットの過大な紹介、デメリットへの言及の少なさ）を感じさせる報道を行ったことが、幾度もあると思う。

いま考えてみれば、ああすべきだった、こうすべきだったということはあるが、いちどしてしまったことは取り返しがつかない。一生、背負うべきものだと思う。

だからこそ、ここで考えたい。私、および私の属するマスメディアの報道者は、なぜ「誤った希望」を伝えてしまうのだろうか？

要因はいくつもあると思われるが、ここでは4つを挙げたい。

まず1つの要因は、「わかりやすい」報道をしたいとする誘惑だ。

私が番組を作るときのことを考えてみる。ある治療法を取材すると、さまざまな情報が手に入る。効果を示すものもあるが、一方でその治療法の限界や、デメリットを示すものも多い。たとえば抗がん剤では、腫瘍の縮小効果を示すデータがある一方で、副作用が強く、OS（総生存期間）は伸びていなかったりする。さらに、少しのOSの延長のために、多額なコストがかかっていたりしているケースもある。

ところが取材者は、このすべてを紹介しない。もちろん、誌面や番組尺が限られているから、というのもあるのだが、メリットとデメリットを併記すると、「いったい賛成なの？反対なの？」という、とても分かりにくいものになってしまうケースがあるからだ（もちろん両論を併記してもわかりやすいものもあり、要は取材者の能力に左右されるのだが）

2つめの要因は、皮肉なことに、取材者の「誠意」だ。

私がこれまで出会ってきた同僚や同じ業界で働く人々は、思った以上に誠実に「良きニュースを伝え、他人の役に立ちたい」と考えている。だから少しでも希望を与える様なニュースを取材でき

たとしたらたら、それを多くの人に知ってもらいたくなる。場合によっては、多少、デメリットに目をつぶってしまいたくなることもあるだろう。

3つめの要因は、記事の持つ発信力を「利用」しようとする人の存在だ。

「利用」と書くと悪いもののような気がするが、決してそうではない。例えば数が少ない難病の人など、どうしても忘れられがちな人たちが、その存在をアピールするために記者と知り合うことは意義あることだし、このことは、そもそも報道の一つの使命でもある。ただ、医療や福祉のPRを専門にする会社などでは、記事の発信力を文字通り「利用」するために、メリットを誇張したプレスリリースを各社に送ったりすることもある。また優秀な官僚が作成し配布する資料の中には、自分たちの政策を好意的に報道させるために巧妙な仕掛けが行われているものもある。こうしたワナにまんまと陥った結果、報道者本人は良いことしているつもりで、悪い影響を世のなかに及ぼす番組を作ってしまったたりすることがある。

そして4つめの要因。これが最も根源的なものだと思うが、それは「不勉強」だ。

なぜなら上記の1-3の要因（ワナ）は、報道に関わるものが基礎知識を勉強し、不誠実なものを見抜く眼力と助言者を持ち、メリットとデメリットをわかりやすく併記する表現力を持てば、クリア可能なものだからだ。

しかしそうした力なく報道する場合、取材者はたやすく3つのワナに落ち込んでしまう。そうして他人を傷つけたり、世の中に悪い影響を及ぼしたりしてしまう。そこに悪意はない。だからこそ、怖いのだ。

今回のゆきさんのお話にあった、「子宮頸がんワクチン」は、そうした悲しい例のひとつだ。なお私自身も、ゆきさんからこのワクチンの課題点や動機の不純さ、そして巧妙なPR作戦のことを伺うまで、まんまと「良いもの」と思い込んでいた。不勉強さを、痛感する。

ただ、いまはこう考えたい。今回、ジャーナリズム分野の大学院に進み、多くの人と出会い、自分の誤りや至らなさを痛感させていただけることは、本当に幸せなことだと。

報道に関わるものが不勉強になる要因の一つが、「忙しさ」だ。

日々、仕事に追われる中で、プレスリリースや記者会見の資料をもとに番組を作ったり、権威の意見を無批判に報道したりすれば負担が減る。そしてもし、その内容が間違っていたとしても、私は「騙されただけ」と責任を逃れることもできる。しかし自分の至らなさを指摘されればされるほど、そうした「ラク」な道に流れようとする弱い部分を克服できるような気がする。

これからの3年間（で終わるかはわからないが）のなかで、私は私なりの方法で、勉強していきたいと思う。「ワナ」を見抜く眼力を、より良い道を助言してくれる仲間を、本質を示せる表現力を得たいと思う。

番組を見てくれた人たちや、協力してくれた人たちが本当の意味で幸せになる番組を作る力が、社会を良い方向に変えようと取り組む人たちの助けとなれる力が、この身に宿って欲しいと願っている。